

英文法教育の見直し

——命令文について——

清水 克 祐

[はじめに]

日本の中学校などでよく見られる風景に、英語の時間が始まって先生が教室へ入るや否や、どこからか大きな声が出て、“Stand up!” つづいて“Bow!” そして“Sit down!” この掛け声に合わせて生徒はがやがやと席につくセレモニーがある。これは日本語の「起立、礼、着席」を英語でパフォーマンスしたものだが、これを目撃した外人たちはたいてい目を丸くしてびっくりする。第一にこのようなセレモニーは英米の学校にはまじない。第二に Bow! という掛け声とともに生徒が一斉に頭を下げる日本人の集団指向性の異様さ。見学に来た外人たちはカルチャー・ショックをもちこむわけである。

本稿は、英文法にある命令文を再考して、英文法教育の見直しを計りたい。

文法教育の見直しは、通例、新しい文法理論の研究に基づいて、その応用として教室での指導の実際を修正するものであが、ここでは視点を少し変えて、英語文化のコンテキストの中で命令文という発話行為を考察して、見直しを計りたいと思う。

1. 日本の教科書英語

日本の中学・高校では、文部省検定済の英語教科書を用いて授業が行なわれる。これらの教科書は文部省制定になる学習指導要領に準拠しなくてはならない。その学習指導要領の内容については、相当に再検討しなければならない所があるが、今はそれらを論ずる余裕がない。

問題は、教科書の英語が学習者にとって、また一部の先生方にとって絶対的なものと受け取られることである。その意味は、指導要領で命令文や感嘆文を教えることと決められていると、教科書のどこかでそれらの文法を教えなくてはならない。生徒はそれを学ぶ。その教科書にある命令文や感嘆文を実際の英会話で使うとなると、相互のコミュニケーションの上で、相当の問題点が起こることをわれわれ日本人は気づいていない。英語学習上の、あるいはわれわれが英語を話すパフォーマンスの上での陥し穴 (pitfalls) がいくつもある。

ある中学1年用の英語教科書をのぞいてみると、第6課で命令文が導入され、まとめIIにこうある。

④命令・禁止・勧誘を表す文

Open the book. Don't open the book.

Let's open the book.

まとめとしてはこれで結構だが、この種の英語がだれに対しても、いつでも、どこでも用いられると受け取られることに問題があると言いたいのである。

2. 命令文はいかなる環境で用いられるか

結論から言うと、命令文を用いると、相手に失礼になることがあるから、その使用に限界があることを学習者に教えなくてはならない。文法は文法で終わらないのである。

命令文がストレートに用いられる環境に次の例がある。

1) 軍隊などにおいて上官が部下に命令を下す場合。これは文句なしである。話し手と聞き手に power difference (権力差) が歴然とある場合である。2) これほどの権力差はなくても話し手が聞き手に命令を下せる権利がある場合、命令文を使ってよい。たとえば、物乞いが来たり、セールスマンが玄関先でしつこくねばるときなどは、日本語の「出て行

け」同様に Go away!, 単に Away! Beat it! などが用いられる。

SALESMAN: Apples. Two dollars a box.

DAGWOOD: No. Don't want any. Beat it!

「リンゴいかがですか。ひと箱 2 ドルです」

「いらぬね。とっとと出ていけ」

—Blondie

3) 形は命令文であるが、命令の意識がうすれて、あいさつ語になっているのがある。たとえば Take it easy! がそれで、車で長い旅をする人に対して、「じゃあね、道中長いんだ、ゆっくり行けよ」の意味で Take it easy! 次は旅をした人に対して用いた例である。

BLANCHE: Travelling wears me out!

STANLEY: Well, take it easy!

「旅で疲れ切っておりますの」「それじゃ、お休みになって」

—Tennessee Williams, *A Streetcar Named Desire*

4) 緊急事態で、相手に注意をうながすとき。

Stop! Look out! Watch out! Mind out! Hurry up!

これらは相手がだれであってもよい。

Mind the step! (足許に注意)

Mind your head. (頭上に注意)

Mind the dog. (犬に注意)

これらは、口で言ってもよく、また注意の掲示標識ともなっている。

5) 命令文を用いて、話し手が強い感情的な色彩——たとえば、怒り、いらだちなどを表わすことがある。命令文に you を添えて言うと、怒りが一層はっきりする。——

Hey, buddy! Watch where you're going!

(よう、そちらさん! 一体、どこ歩いているんだ! 気をつけろ!) —The Grammar Book

BLANCHE: . . . Yes, accuse me! Sit there and stare at me, thinking I let the place go! I let the place go? Where were *you!*

In bed with your——Polack!

STELLA: Blanche! You be still! That's enough!

「ええ、私を非難しなさいよ！ そこにすわって、私をじろりと見つめて、私がああ屋敷を手放したなんて考えて。私が屋敷を手放したって？ あなたはどこにいたの！ ああポーランド人といっしょにベッドにいて！」「ブランシェ、あなた、おだまり。もうたくさんだわ」——T. Williams, *op. cit.*

3. 命令文をやわらかく言う方法

権力差はないが、相手に命令文でこちらの意志などを伝えなければならぬ場合が、日常生活でかなり起こる。表現形式は命令文であっても、この場合、“cooperation is assumed.”（相手との協同作業が当然行なわれる）のであるから、相手にやわらかく伝えるように心掛けるべきである。このため、命令文に *please* を添える、付加疑問 *will you?*, *won't you?*, *would you?*, *can you?* などを添えるなどの仕組みが用いられる。またイントネーションも上昇調で用いたやわらかい感じを出す。

- 1) Be quite, please.
- 2) Be quite, can't you?
- 3) Shut the door, would you (please)?

この *please* 付きのていねいな命令文の反対をなすのが *just* である。

- 4) Just shut door.
- 5) You just shut door.

4) と 5) では、「早くドアを閉めろ、何をぐずぐずしているんだ」の話し手のいら立ちなどを示す。またこれは最終通告的な命令文である。

4. 命令文を使うのを避けた別の言い方

相手との協調を意識すれば、なるべく命令文の形式を避け、他の言い方を用いようとする傾向が英米人の言語生活にあるようだ。こういうデリカシーをわれわれも学び取る必要がある。

- 1) Would you please shut the door?
- 2) Could you please shut the door?
- 3) I wonder if you would shut the door.
- 4) I'd appreciate your shutting the door.

以上の例は、「ドアをしめて」を仮定法を用いたりして、ていねいに言い表わしたもの。

2-3)で「どけ」の例を出したが、これもていねいに言えば、

I wish you would go away! (おさがりあそばせ)

となる。これは何んとあるときエリザベス女王が用いられた表現と *Newsweek* 誌で紹介された。

次はアメリカの現代劇からの実例をひとつ。禁止を表わすややフォーマルな言い方で、母親が息子に言っている。

AMANDA: Temperament like a Metropolitan star! (*Tom rises and crosses downstage*) You're not excused from the table.

TOM: I'm getting a cigarette.

AMANDA: You smoke too much.

アマング：おまえの性格は、メトロポリタン歌劇場の花形歌手みたいに気むずかしいのね。トム、食卓から離れちゃだめ。

トム：たばこを取りに行くんだい。

アマング：たばこのすいすぎよ。

— Tennessee Williams, *The Glass Menagerie*

【注】 You're not excused from the table. が命令形の変形。

先に命令文を英語文化のコンテキストの中でとらえなくてはならぬ、と書いたが、その証拠のひとつに、米国で発行されている『エチケツト辞典』*The Encyclopedia of Etiquette* に次のような社会生活を送る上でのアドバイスのひとつが出ていた。

アパートで、隣の部屋のテレビの音が夜中に大きかったとする。そのとき「おい、そのテレビの音を小さくしろ」Hey! Turn down that TV! とでもどなると、そのどなり声がかた騒音源になるし、場合によっては口げんかを誘発するから、それを慎んで、かわりに電話をかけて、冷静にフォーマルな抗議をするに限る、とその辞典に出ていた。

“I’m sure you don’t realize that you keep us awake when you watch the Late Late Show.”

(深夜ショーのテレビをつけられて、こちらがねむれないで困っているのが、おわかりにならないのですね)

[おわりに]

従来の英文法研究では、英語を形態と意味の両面から考察して理論が構築されてきたが、ややもすると形態論が優先し、意味の方が置きざりにされてきた。

近ごろ研究の成果が著しい「変形文型」においては、

命令文には主語名詞句がない。

しかし、命令文の基底構造には2人称代名詞の主語NPがあると言える。

で片付けられる。(The Grammar Book chapter11)

しかし英文法の指導においては、英語文化のコンテキストの中で現実の usage を考察しつつ、コミュニケーションが計れる語学教育を目指し、実践して行かなくてはならない。